

「特集を組むにあたって」

専修大学の研究プロジェクト「古代東アジア世界史と留学生」は、平成19年度に私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業に応募し、幸いにも採択され、3年を経過した。

この3年間は、同時に、専修大学が2009年に創立130年を迎えるということで、そのための記念事業が数多く立案・実施された3年間でもあった。

「古代東アジア世界史と留学生」の研究プロジェクトは、2003年より5年間にわたって文学部人文学科歴史学専攻の教員が中心になって組織・実施された同事業の研究プロジェクトである「フランス革命と日本・アジアの近代化」に学ぶものであるが、直接的には、2004年10月に国際的な報道となって周知された「井真成墓誌」の発見に本学が深くかかわり、2005年1月28日・29日の両日に専修大学・西北大学による共同研究シンポジウムと市民セミナー「新発見 遣唐使の墓誌をめぐる」を準備し、開催した蓄積を基礎にして、展開させたものである。

専修大学は、明治維新後、アメリカのコロンビア大学、エール大学、ハーバード大学、ラトガース大学に長期にわたり留学した相馬永胤、田尻稲次郎、目賀田種太郎、駒井重格の4人の創立者たちによって、1880年（明治13）に創立された大学である。

創立者たちは、留学によって得た、最新の知見を社会に還元し、近代の黎明期にあった母国日本の発展に寄与しようという思いに満ち、その夢の実現が専修大学の創立につながったのである。

こうした創立時の歴史は、記念事業の中で生み出された作家の志茂田景樹氏による小説『蒼翼の獅子たち』（河出書房新社、2008年）や本学教員・職員が執筆に参加した専修大学の歴史編集委員会編『専修大学の歴史』（平凡社、2009年）等の刊行によって、以前とは比較にならないくらいに、知られるようになってきた。

「東アジア世界史研究センター」の研究プロジェクトは、時代こそ異なれ、古代アジアにおいて先進文明国に位置する中国への留学生を多様な視角から明らかにし、その果たした歴史的な意義を問うものである。

したがって、「古代東アジア世界史と留学生」の研究プロジェクトが、こうした本学の創立時の歴史と全く関係なく立案されたわけではない。

近代日本の成立と海外渡航-留学生の問題は、近代史においても今なお興味尽きない研究テーマとしてあるようである。

しかし、今日の日本古代史研究は、日本古代の留学生-遣隋使・遣唐使が、日本の古代国家に大きな影響を与えたといった平板な理解では、すまない段階にまできている。

そこで、遣隋使・遣唐使の意義を、比較の中で考えてみるために、新羅・渤海といった東アジア圏の古代国家の歴史からや、また、自国の中で比較するために、日本中世史の国際関係史から

の報告をお願いしているのは、新しい研究段階に対応させるためでもある。

本号は、前号までと同様に、多くの研究者の協力を得て実施した東アジア世界史研究センターが、3年目に取り組んだ7月と11月の二つの公開講座・シンポジウムを特集したものである。

執筆者の各位は、いずれもお忙しい方ばかりであり、報告だけでなく、その後の文章化までをお願いする依頼に困惑されたものと思われる。原稿をお寄せいただいた各位にお礼申し上げます次第である。

また、前号と同様に、本号でも中国における「井真成墓誌」研究の日本への紹介も兼ねた論文翻訳の成果の一端を収録することができた。執筆者の馬一虹氏は、現在、病魔との闘いの中にいる。人を介して翻訳・掲載のご了解を得ることができた。氏の一日も早い回復を祈念いたします。

付記

馬一虹氏は、回復の祈念も届かず、2年10ヵ月に及ぶ闘病生活の末、3月5日の5時に北京の病棟で逝去されました。中国における、日本の古代史に精通した有為な研究者を失った悲しみは限りなく深い。

ここに、馬一虹氏の御逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。

(荒木敏夫)